穆時英における戦うことの意味

――革命・国家・共同体――

高橋　俊

はじめに

穆時英［一九一二～一九四〇］はこれまで、劉吶鷗や施蟄存らとともに、中国新感覚派の代表作家と見なされてきた。新感覚派は、半植民地下に置かれていた一九三〇年代上海のきらびやかな世界を描いた作家として、主に知られる。穆時英の四冊の小説集（『南北極』湖風書局、一九三二［のち現代書局、一九三三］／『公墓』現代書局、一九三三／『白金的女体塑像』現代書局、一九三四／『聖処女的感情』良友図書印刷公司、一九三五）が次々と出版された時、彼はまだ二十代の前半。人生の最も多感な時期に書かれた小説群は、それ故に、租界を中心とした都市生活の華やかな描写において、一層のリアルさを有していた。ダンス・ホールに出入りする彼自身の派手な私生活が「小報」（イエロー・ペーパー）に書き立てられたことも、相乗効果のように彼の小説を引き立てた。「彼はまるでゴシップにまみれることを楽しんでいるかのようで」、「自分の身体をイメージ化することにより、自分の人生を小説として実践していた」(1)と言えよう。

ところで、彼は生涯に三篇、戦争をテーマとした小説を執筆している。『交流』（芳草書店、一九三〇）、『空閑少佐』（良友図書印刷公司、一九三二、後『白金的女体塑像』所収）、そして「我們這一代」（『時代日報』一九三六年二月一六日～四月二三日）である。大まかにいえば彼の前期、中期、後期の作品と規定することができるであろうこれらの作品は、みな戦争に直面した若者の行動を描いたものである。これらの小説が舞台とする戦争（『交流』は北伐、『空閑少佐』「我們這一代」は一二八事変）は、そのまま、穆時英やその同時代人が実際に体験してきた戦争でもある。彼の生涯は、きらびやかな都会の生活によってのみ彩

られていたわけではなく、常に戦争の影にも脅かされていたのである。彼の小説創作も、決してダンスホールやカフェなどの「モダンな」構成要素のみからなっているわけではなかったのだ。

もちろん、題材が即作品の善し悪しを決めるわけではないし、戦争小説がモダニズム小説よりもそれ自体として優れているというわけでもない。また、穆時英の戦争小説にはモダニズム的手法も取り入れられているため、彼の創作をどちらかに分類するということも、そう簡単なことではない。一つ言えるのは、穆時英を論じる際には、どうしても「海派作家」「モダニズム作家」という「看板」が先行し、小説創作における思想上の問題点をすべて「モダニズム」へと還元する傾向に置かれてきた、ということである。

本稿では、穆時英の三つの作品、特に「我們這一代」を中心として、穆時英の創作の軌跡から、「戦うこと」がいかなる意味を持たされていったのか、戦争においてなにが守られようとしていたのか、を浮かび上がらせ、そこから、彼の小説が持つ戦争というものの表象とその変遷を確認したい。それは、「戦うこと」が必然的にもたらすアイデンティティの生成／変容（「何のために戦うのか」）を、穆時英という一作家の体験に即し、さらにはこの時代の青年に即して検討することでもある。

一般に、一九三一年の満州事変（九一八事変）によって、抗日ナショナリズムが「一般意志にまで高められた」(2)とされている。事実、満州事変以降、抗日意識はさまざまなレベルにおいて噴出し、抗日ナショナリズムは一九四五年に至るまで、中国を覆う重奏低音として鳴り続け、国民国家の樹立へと向かう上での原動力となった。

しかし、そうしたナショナルな動きの中に、それとは別の、新たなアイデンティティ胎動の音を探るのも、意味のないことではあるまい。それは、ナショナルなものを全否定するわけではない、しかしそれを相対化し、新たな可能性をも見出すという点で、貴重な題材となるように思われるからである。

一『交流』

『交流』は一九三〇年五月、芳草書店から単行本として発行された。穆時英は当時（満）十八歳、光華大学文学院特別生であった(3)。

この小説が舞台とするのは、一九二六年の上海である。前半部では、主人公の大学生項雄霄の学生生活が描かれる。項雄霄は、彼を溺愛する両親と暮らしており、すでに親同士が決めた婚約者施書瑛がいるが、彼は無教育の婚約者を全く愛していない。しかし彼は両親や婚約者を傷つけることを恐れ、そのことを言い出せず、悩んでいる。

前半部の大半は若者たちの三角・四角関係などの恋愛模様で占められている。項雄霄が親に内緒で、広東の黄埔軍官学校への入学を決意するのも、秘かに思いを寄せていた陸霞玉が彼の同級生の婚約者（これも親同士の決めたものだった）であったことを知ったショックからであった。

しかしながら、この小説では、親同士の決めた結婚（「包辦婚姻」）への嫌悪がストレートに親（が象徴する封建制度）への反発には結びつかない。項雄霄は常に、母親の愛情に感謝し続けている。陸霞玉に婚約者がいることを知り、その苦しみから寝込んでしまうシーン。

「どこか具合の悪いところはないかい、雄ちゃんや？」彼女は彼の額をなでた。

彼は声を出さず、無理矢理笑ったが、母の憂いに満ちた両眉を見て、いささか不安になった。彼は母が蚊帳を閉じ、窓を閉め、彼をちょっと見て、憂鬱な足音を引きずりながら、うつむいて出ていくのを見て、思った。

「母親の愛こそ世界の至上の愛だ、何者も奪うことはできず、破壊することはできない、神々しい輝きをいつまでも放ち続けるものだ！」

それ以外にも、小説中で、項雄霄は常に母親の愛を感じている。

彼が客間に入っていったちょうどその時、母親は電話をかけ終えたところであった。母親を見ると、彼の心はずいぶんホッとした——母は本当に彼を愛しているのだ！

「お母さん！」彼は幼子のように心を込めて呼んだ、まるで、世の中で失敗した子供が再び母親の懐に戻ってきたかのように。母親は彼を見た、天性の慈愛と喜びに満ちたまなざしは、なにか尋ねるような含みを帯びていた。

のちに項雄霄は戦場へと飛び出すが、そこでも、彼が思うのはやはり母のことである。

「母さんはたぶん泣いているだろう」彼は暗然と考えた。

北風が吹いていた。

「ああ、もし家なら、母さんが僕に布団を掛けてくれているだろう！」

この、いささかマザコン的ともいえる主人公の言動からは、後述するような、五四以降繰り返し語られてきた、封

建制度の体現者として親を見、親から飛び出すことが封建制への反旗となるという視点は全く見ることができない。項雄霄が家を出て広州へ赴くのも、親が決めた結婚に反発したことを原因とはするが、その時にも、憎しみの対象は親ではなく、むしろ自分ではなく別の相手を選んだ（と項雄霄が思い込んだ）陸霞玉へ、そして陸霞玉の結婚をとりもった謝という老人へと、逆恨み的に向けられるのである。ここからは、母親の愛情をいささかの疑念もなく無条件に肯定し、受容しつつ、自らに降りかかる問題の責任を全て他人へと転嫁するという、ある意味「現代的」な若者といえる主人公像が浮かび上がる。

後半では、広東へ行ってからの項雄霄の行動が描かれる。黄埔軍官学校を卒業した彼は北伐戦に参加し、負傷する。病院での看護婦とのロマンスをはさみ、団長に昇格した項雄霄は、国民軍を率いて上海入城を果たす。

しかし、ここから彼は陸霞玉恋しさのあまり狂気に蝕まれていく。彼女が結婚を嫌がって泣いてばかりいるという話を聞きつけ、拳銃を手に、結婚相手の家に押し掛ける。そこで彼は謝老人を射殺し、その後陸霞玉の家に行き、自らの胸にも銃を放つ。

瀕死の項雄霄のもとに母親が駆けつける。

「雄よ、私はまたお前を失ってしまうのかい？　お、またお前を、お前を……」

彼の意識は次第に朦朧としてきたが、まだこれが母親の声だと聞き分けることはできた。彼は力を振り絞って応えようとした。「お母さん！」

結局主人公は最後まで（母）親という揺りかごから抜け出さず、母親に抱かれながら死んでいく。

何とも据わりの悪い、放漫な印象を与えるストーリーは、もちろん処女作ゆえの未熟さにも起因しよう。しかし、それ以外にも、主人公を戦場へと赴かせる動機付けが、今ひとつはっきりとしないことにもその要因があるのではないだろうか。ここで若者を戦場へと駆らせる理由は、あくまでも自由恋愛に失敗したことが原因の、破れかぶれの衝動的なものであり、それ以上のものではない。ここでは、穆時英よりも八歳年長の巴金が『家』によって表現したような、封建的・因習的な家からの脱出と革命とが密接に結びつくというテーマは、全く捨象されている。

しかし、逆にいえば、これこそが『交流』における重要なポイントともなる。五四時期においては、革命は、国民国家形成へと至る重要な使命であり、一方恋愛は、革命を達成する上での極めて重要な要素であると考えられていた。自由恋愛をして、その結果封建的な「家」から脱出することがそのまま革命へとつながり、ひいてはそれが国民

国家形成という大きな目標へと貢献することになるという思考回路は、当時の知識人青年たちに熱狂的に受け入れられた(4)。

しかし、『交流』では、国民国家形成あるいは革命のような大きな物語とは全く無縁なところで、戦争への参加が決意される。戦いへと参加することは、主人公にとって、恋愛における欠如感を埋め合わせるために、恣意的に選択した手段の一つでしかない。ここでの戦闘参加は、あくまでも「個人的」な要因により選び取られたものであり、恋愛と革命が「ユートピア」的に結びついていた五四時期の状況とは、まったく異なるものである。

それゆえにというべきか、この小説において、敵は明確な姿を取らない。いってみれば、戦う相手は誰でもよいのであって、敵を細かく描写する必要はない。陸霞玉の兄陸剣に広州に行く理由を聞かれて、項雄霄は「従軍――いや、流血！」、「僕はただ……僕はただ血を流したい、僕はただ復讐したい――」と答えているように、戦い、傷つくことがそのまま陸霞玉への復讐となるという、短絡的な理由が述べられてもいる。

さらに、そうした「個人的」な理由の積み重なり、若者の鬱憤の積み重なりこそが、革命を生んだ原動力なのだと、『交流』では規定されている。「あの偉大な、流血の一九二六年は、青年の鬱屈した心から生まれた！」、「失恋、悲哀、失意、これがまさに現代の中国青年なのだ！」。青年たちの鬱屈した心理をそれ自体として評価し、その総体こそが革命という大きな力となりうるという作者の革命観・若者観を窺うことができる。

『交流』は、都市の青年の鬱屈した心理を描くとともに、そうした心理を集体させたものとして、革命（戦闘）を描いている。そしてまた、そうした心理を共有するものとしての若者の連帯感を、評価しているといえよう。

このように、『交流』では、戦争の要因を、青年という世代的な連帯感、青年に共通の心理から捉えることに焦点が置かれていた。ここでは、戦闘は（青年、あるいは「中国」の）「内部」から噴出したものとして描かれている。これは、この小説が舞台とする戦争が、北伐という、いわば「中国人同士」で行われた戦争であったことにも起因しよう。しかし次の二つの小説では、舞台は一二八事変という、二つの国家による争いとなる。

二　『空閑少佐』

『空閑少佐』は一二八事変で捕虜になった後自殺を遂げた日本軍の実在の人物を主人公とした小説である。空閑少佐が捕虜として中国の病院で治療を受けている間に彼の看護を務めた少女黎姑娘と恋に落ち、日本帝国軍人としての

誇りに疑問を抱くようになり、帰国後自殺に至るというストーリーである。

『空閑少佐』についてはすでに鈴木将久氏の詳細な読解(5)が提出されているので詳しくはそちらに譲るが、この小説におけるテーマは、一義的には「日本軍の非人道的な行いに対する糾弾」といえよう。小説中で「武士道精神」と称されている、日本軍の非人間的な帝国主義的思想に染まっていた青年軍人が、無垢な中国人看護婦と出会うことで、自らの犯した様々な罪悪について思い起こし改心するも、帰国後には自殺に追い込まれるという筋立ては、このテーマを分かりやすいほどに示している。

しかしながら、日本軍人が表象するナショナリズムに対し、それを揺るがし、崩壊させるのは、もう一つのナショナリズム（＝中国ナショナリズム）ではないことが、ここでは注目されよう。空閑少佐の帝国軍人としてのアイデンティティが崩壊するのは、それと対等に向き合うようなもう一つのアイデンティティとの衝突によるものではない。それはあくまで、黎姑娘という生身の人間が媒介する人間性とでもいうべきものである。

空閑少佐の心境を、順を追ってみていく。病院に収容されたばかりの時に彼が考えたことは、日本にいる妻と子のこと、そして治癒して帰国した後には、恐らく自分は軍部から自殺を命じられるだろう、ということであった。しかし、日本軍人として数々の悪行を尽くしてきた自分に対し、黎姑娘はそのことには全く触れず、優しい気持ちで自分に接してくれる。そして彼女は、「空閑さん、国へ帰って戦争に反対してくださいね」という、極めて素朴な感情によって、空閑少佐の感情を変えていくのである。

空閑少佐の考えも、少し変化してきた。彼はもう自殺を考えなくなり、敵を殺す栄誉についても考えなくなったが、時には自分が卑劣で、帝国軍人と称するにはふさわしくない、と突然考えることもあった。でも、なぜ帝国軍人は絶対に自殺しなくてはならないのか？執拗に自分に向かって問いかけた。これが武士道精神であり、これが大和魂なのだ！　しかし、みんなが仲良くするのはよいことではないか？　戦争、それは、どうしてやってくるのだ！

彼はまた血の詰まった穴、さまざまな死体、頭のないのや、腕や足のないのや、腸の漏れだしているのや、木に掛けられているのや、戦車の車輪の下敷きになっているのや、木造の家の中で焼けているのや……を見た。ここには日本人もいれば、支那人もいる。しかし彼らがどんな罪を犯したというのか？　彼らは誰も誰かを殺したいとは思っていないが、みんな誰かに殺さ

れている。これは彼らの後ろに隠れていた人であり、そのバカども、詐欺師どもが彼らを戦わせているのだ。彼らはみんな死んでしまった、しかし彼らに何の罪があるのだ、何の罪が！

「黎姑娘、僕は死ぬべき人間だ。僕はこの手で多くの支那人を切ってきたし、僕の部下も銃殺してきた。こんなに多くの人を、多くの人を……」

自分を殴ってくれ！　自分を罵ってくれ！　彼の犯した罪を罵ってくれ！

しかし黎姑娘はただこういった。

「誰が悪いの？　あなたが悪いの？　いいえ。結局私たちはどうして戦っているの？　でももういいわ、過去のことを持ち出してどうなるの？　あなたはまだそんなに興奮してはいけないわ」と、彼の表情を憐れんだ。

彼は彼女の足下に跪いて泣きたかった、許しを請いたかった。彼女は話題を変えた。

「月日のたつのは早いわね！」

「そうだね、本当に早いね！」

しかしながら、帰国して待っていたのは、予想していたように、同僚や上官たちの冷たい仕打ちであった。彼は、帝国主義的・男性主義的理論から決定的に拒絶され、自らを死に追い込む。

この小説で糾弾されているのは、なによりもまずは日本帝国主義の軍隊における理不尽さである。その目的は、ようやく「目覚めた」空閑少佐が自殺に追い込まれるという設定によって、実際に遂げられている。

しかし、小説中の空閑少佐は、日本の帝国主義的攻撃性（＝武士道）からの逃避としてもう一つのナショナリズム（＝中国）へと逃げ込むことはしない。ここで彼を目覚めさせたのは、武士道やナショナリズムとは無縁なものとして表象されている、無垢な少女である。

空閑少佐は少女との触れ合いの中で一時の安らぎを得る。そこで彼は、ナショナリズムのぶつかり合う戦争という場から逃れ、戦いそのものを忌避するようになる。彼がその時に頼りとしていたのは、いかなるイデオロギーでもなく、まさに目の前にいる、一人の人間であったのだ。

だが、彼はそうした位置に安住することはできなかった。彼が最後自殺に追い込まれるのは、帝国主義的論理への屈服に他ならない。小説の最後、「すべてがなくなった［原文：什麼都没了］」という文章で言い表されているのは、「「語ること」そのものの不可能性」(6)であると同時に、頼るべきもの、すなわち、帝国軍人が表象するナショナルなアイデンティティがすべて失われた空閑少佐の実像そのものも表しているのではないだろうか。空閑大佐にとって、

そして『空閑大佐』を執筆した時点での穆時英にとって、ナショナルなアイデンティティの喪失は、死へと結びつくものであったともいえよう。

三　「我們這一代」

1　あらすじ

「我們這一代」は、『時代日報』(7)の「二十世紀」という副刊に約二ヶ月にわたって連載されたが、『時代日報』の停刊に伴って、未完のまま中絶してしまった作品である。

この作品が描くのは、「空閑大佐」と同じく、一九三二年に起こった一二八事変である。一二八事変は、上海市内を戦場とする初めての本格的な市街戦であり、物質的にも、精神的にも、深い傷跡を残した。

「我們這一代」は、許仕介という大学生を主人公としている(8)。上海の北側、閘北地区に日本軍（原文では全て「某国」となっている）が攻撃を仕掛けてくるという噂が流れ、許仕介も家族とともに一端フランス租界へ避難する。しかし、彼にはどうしてもその噂が信じられず、もう一度宝興路の自宅(9)へと戻ってくる。彼がタバコをふかしながら外を眺めていると、あちらこちらに兵士の姿が見える。呼び鈴が鳴り、門を開けると、小隊の隊長らしき軍人とその部下一七、八人が入ってくる。隊長は「なぜ逃げないのだ？」と問いつめるが、許仕介は逃げようとしない。隊長は諦め、許仕介を無視して彼の家の敷地の中で敵を迎え撃つ準備をし始める。

突然、銃声が聞こえる。一九三二年一月二八日午前〇時二七分、最初の銃弾が発射されたのであった。許仕介には、「こんなにぎやかな都市のなかで、戦争、虐殺、流血、突撃など、まったく想像できないことであった」。やがて撃ち合いが始まり、日本軍の戦車がやって来るが、一人の中国人兵士の勇敢な行動によって、これを破壊することに成功する。激しい戦闘の末、この部隊は敵を撃退する。彼は勝利のうれしさに飛び上がって喜ぶ。

ところが、部隊はこれ以上進むことをしない。命令がないからだという。隊長は彼に、やはり今のうちに逃げろという。しかしあくまでも自ら銃を取って戦うことを願う仕介の懇願に根負けした隊長は、許仕介に隊への臨時の入隊を許可する。

ついに本格的な戦闘が始まると、彼は肩に銃弾を受ける。しかし味方の勇敢な戦いによって、敵を退却に追い込む。気づくとあたり一面死体の山で、あちらこちらから火が上がっている。彼の家も、いまや完全に火に包まれていた。許仕介は怒りに燃え、突撃を主張するが、隊長はとりあわない。と、敵の攻撃がふたたび始まる。彼が前進しようと

したとき、肩に冷たさを感じ、続いて温かいものが流れ出した。次の瞬間、彼は意識を失う。

ここから小説は第二章に移り、赤十字病院のシーンとなる(19)。目を覚ました許仕介は、最初自分がどこにいるのかわからない。大きな部屋に十数台のベッドが置いてあり、それぞれに死んでいるかのように動かない人々が寝ていることから、ここが病院だということがわかる。

彼はまず家族のことを心配する。自分の死に痛哭する父と母、全上海市民、そして恋人の李玲仙を想像して泣き崩れる。許仕介は医者か看護婦を呼ぶために叫ぶが、まったく反応がない。しつこく騒いでいると、そばのベッドで寝ていた兵士にどなられる。しばらく兵士と話を続けるが、やがて疲れて眠ってしまう。目を覚ましたとき、二人の苦力がさきほどまで許仕介と話をしていた兵士を運びだそうとしていた。どこへ運ぶのかと聞くと、二人は答える、「霊安室だよ」。

小説は西洋人医師が現れ、看護婦が登場し、さてこれから、というところで終了してしまっている。

2　守るべきもの

この小説における主人公の戦争への参加は、『交流』同様、衝動的・偶発的なものである。そもそも彼は、戦闘に参加すべき義務を持たない一般市民である。しかし彼は、自分が「二十二年間生活し」てきた「平穏で、楽しい家」が、「敵の砲撃により、残酷にも燃え始めた」ことへの怒りから戦闘に参加する。

だが、主人公が最初の戦闘に勝利した（と思い込んだ）直後、彼が真っ先に叫んだ言葉は、第二章の標題ともなっている、「我々は赤い血によって我々の上海を守ったぞ！［我們用赤血守衛了我們的上海！］」であった。これ以降、許仕介が戦闘において命を懸けてまで守ろうとしているものは、「上海」という共同体であるというストーリーが、ごく自然に展開されている。租界へ避難した方がよいと繰り返し勧める排長に対し、許仕介は「僕にはあなたのいっている意味が分からない！　あなたには見えないのですか？　ここは私の家であり、私の財産なのです、上海を守るのはあなたの責任でもありますが、また同時に私の責任でもあるのです。あなたは何の権利があって、私の戦争への参加を拒絶するのですか？」と訴える。ここでは、自らの家・財産を守ることが、「上海」という共同体を守ることと、イコールで、もしくは延長線上で結ばれている。そして、自らが居住する街を守ることへの責任も、ごく自然に提示されているのである。

日本軍をいったん退却に追い込んだあとの、許仕介の回想。

そして彼は自分の額に血が流れ、衣服は銃弾でぼろぼろになっているのを見、ぼさぼさになった頭で南京路を歩いている。道の両側には数えきれないほどの民衆が感激した声で叫んでいる。

「我々の英雄万歳！」

李小侯、丁樹徳、孫君実と同級生十数人が、人込みから走り出て、彼を肩の上に担ぎ上げ、爆竹が鳴り騒ぐ狂騒した街の中を歩いていく。無数の目の中に、彼は父と母の歓喜のあまり泣き出さんばかりの目を見つけ、そして李玲仙のビロードのような目を見る……その目はこういっている。

「仕介、愛しい人、もう忘れてしまったの？」

いや、彼は忘れてはいない、彼は、自分が今何をするべきか分かっている。彼は李小侯たちに止まるようにいう。彼らの肩に座ったまま、広大な上海市民を見ながら、彼は自分の秘密、そして決意を宣言する。

「親愛なる市民の皆さん、私にフィアンセを紹介させて下さい、李玲仙です、我々の婚約パーティーは明日の午後行いたいと思います……」

彼がまだ話し終わらぬうちから、まるで海のような人込みの中から、喜びの、そしてお祝いの声が波のように沸き起こり、李玲仙ももう楽しそうに、優しく、笑って彼に寄り添っていた。結婚したら、まずはハワイにハネムーンだ……そうだ、彼らは椰子の木の下で蜜のような最初の一ヶ月を過ごすのだ。

なんとも甘い空想であるが、ここでの許仕介の空想の方向性を追ってみる。許仕介は、自身の戦闘における活躍と自らの婚約を、まず何よりも「上海市民」に報告し、一方（許仕介の空想上の）「上海市民」も、許仕介の行動に応えて彼を賞賛・祝福する。ここでは、彼の戦闘は、自らの家族と、そしてその家族が属している共同体としての「上海市民」のためであるという図式が提示されている。この時許仕介が守るべきものと考え、実際に守り抜いた（と空想した）のは、「愛国／ナショナリズム」という概念によって築かれた国家ではなく、自らが現実に居住する具体的な生活空間としての上海という都市、そしてそこに住む市民なのである。ここでは、一人の青年が戦争に当たって守ろうとしているもの、守らねばならないものが、上海であるという回路付けが、全く自然に行われているのである。

もちろん、国家と同様、上海（市民）という帰属意識も、結局のところ後付けの、想像されたものでしかない。そもそも上海市は一九二七年七月一日、「上海市特別市」として成立した。それ以前、そして市成立直後も、「市民」という意識は希薄なものであり、そこでは同郷関係により、

さまざまな社会システム、そして帰属意識が規定されていたのであった[11]。その上海において、新たに「上海（人）アイデンティティ」が誕生し、それまでの同郷的帰属意識と共存するようになった（もしくは「上書き」された）きっかけの一つが、「我們這一代」が舞台とする一二八事変だったと思われるのである。

上海アイデンティティ出現の契機を一二八事変に求める議論については別稿[12]に譲るが、ここでは、一二八事変が、上海における最初の本格的な市街戦であったこと、戦闘地域が上海に限られた局地戦であったこと、そして敵が日本軍という「外部」から来たものであったことを指摘しておきたい。これらの要因により、一二八事変は、上海という地域の中に、「上海（人）意識」というローカルで、パトリオティカルな意識を注入し、「上海人」としての結束を、極めて強固にしたのではないかと推測される。

「我們這一代」における、戦闘によって何よりも「上海」を守ろうとし、勝利の後は誰よりも「上海市民」へ報告し、ともに喜びを分かち合おうという主人公の思いは、こうした「上海（人）アイデンティティ」の誕生を、見事に反映しているといえよう。そしてそれはまた、戦争という極限の事態に遭遇した青年にとっての、新たな「守るべきもの」の誕生をも、如実に表象していたのである。

3　故郷の誕生・上海の誕生

穆時英は、一九三八年に「懐郷小品」という散文を執筆している。その中の、「Nostalgir」[13]と題された第一節。

全ての家々はぐっすりと眠っている、僕は独り窓の前に座る。

深夜三時だが、山の斜面にはまだ灯りが点っている。静かな暗がりの下、祈祷の鐘の音と歌声が流れる、流れる。香港は今まさに人類による子羊の贖罪、キリストの誕生日をたたえている。

山頂の松林から吹いてくる風は暖かくまた芳しく、渓谷に咲き誇る薔薇は大地に紅を塗ったように赤い。夜は安らかで、平和である、僕は想う、僕が育った上海を想う——ああ、母なる上海！

この後も「ああ、母なる上海！」というフレーズが何度か繰り返された後、第一章の最後に、「ああ、母なる上海、あなたの幸福を願います！　あなたの健康を祈ります！この静寂なる真夜中に、あなたのために祈ります、私の祖国を祈るのと同じように！」と結ばれている。

この文章だけを読めば、単純な故郷愛を謳った、甘く素朴な散文といえるであろう。しかし、彼がこの文章を書い

たのは、香港滞在中のことであった。しかも一九三七年の八一三事変（第二次上海事変）の日本軍の占領により、彼の「故郷」である上海は、少なくとも象徴的には、以前の上海ではなかった。そして香港も、この文章を執筆しているちょうどその時期、日本軍の攻撃に遭い、まさに陥落せんとしていたのであった。

「懐郷小品」第二節「郷音」では、香港における上海出身の少女との出会いが綴られている。

彼女は車代を払うと、親しげに僕の腕をつかみ、こういった。

「ちょっとあそこで話していきましょうよ。私、あなたがしゃべるのを聞きたいの。ああ、上海語、上海語！　見も知らないのに、こんなに親しいなんて！」

香港大酒店の黄色いネオンの下――しかし話していたのは僕ではなく、彼女であった。

「ねえ、私はここにきてまだ一日半だけど、もう一年もすんでいる気分だわ。ああやだやだ、どこでもみんな「頂刮刮」と「亨白冷」[14]。私、上海の言葉にこんなに飢えてたのね！　ねえ知ってる？　上海はもう潰滅してしまったのよ！　私たちみんなの故郷は流亡し始めたのよ（以下略）」

この文によれば、彼らの「懐郷」の対象である上海は「潰滅」してしまっている。しかし、だからこそ、あるいは「異郷」であればこそ、故郷への想いは強まっていくのではないか。外部、もしくは他者と出会い、その差異を認識させられてこそ、アイデンティティはますます強力に凝集するからである。

ところで、穆時英は、実は「上海人」ではない。彼が生まれ、育ったのは、慈渓という寧波近郊の小都市であり、上海に「上京」したのは中学入学時である。彼がきらびやかな都市生活を好んで描いたのは、ある程度成長した後に上海に上京した穆時英が、それゆえに一層上海という近代都市の魅力に敏感であったからだともいわれている[15]。

その彼が異郷で「懐郷」の対象とするのは、上海である。もちろん、散文の語り手と穆時英本人とを無条件で同一視することはできない。むしろここでは、自らの置かれている場の、外部からの攻撃による危機に遭遇したことによって、「想像上」の故郷が析出されていく、そうしたメカニズムが提示されているといえよう。そしてここから、穆時英における「故郷という物語」、そして彼自身のアイデンティティが、新たな誕生を遂げたといえるのではないだろうか。

おわりに

以上、穆時英の三作品から、戦争に遭遇した若者がなにを守ろうとしているのかを見てきた。『交流』ではあくまでも「個人的」な理由によるものであった戦争への参加が、『空閑少佐』と「我們這一代」では、ともにある義務感から戦争へと参加することになる。そして『空閑少佐』でナショナリズムに拒絶される軍人の姿を描いた後で、「我們這一代」では自らの居住する共同体を守ろうとする、青年の心理を描いている。

なお、私はここで、個人的な理由よりも、国家のため、さらには共同体のために戦う方が崇高である、といおうとしているわけではない。穆時英の「守るべきもの」の変化を、穆時英の「成長」ということもできまい。なによりも、「守るべきもの」を暴力的に生じさせ、新たなアイデンティティ（のゆらぎ）を発動させる要因（＝日本軍の侵略に代表される戦争）をこそ、まず糾弾しなければならない。

Shu-Mei Shih（史書美）氏は、穆時英の創作についてこう論じている。

> 私は、穆時英の多様な抵抗――ジェンダーの表象、漠然としたナショナリズム、資本主義への抵抗（しかし半植民地状態それ自体として、ではなく）――を通して、植民地化のリアリティ、そして純粋なテキスト性の実践を――一九三二年前後の、彼が新感覚派に転換してからの作品を読むことによって――解説していく。この読みを通して、穆の植民地下の変容をナショナリストとしての意識の獲得の失敗、または植民地化された資本主義と捉えるのではなく、むしろ半植民地化における中国の中産知識階級の文化的選択として捉えたい。(16)

このあと Shih 氏は、穆時英による新感覚派的（モダニズム）小説の執筆を、「純粋なテクスト性・テクニック性へと退却」することで、「高度に政治化された文化グループによる論争の時代の中で、自律性を獲得」しようとした、その手段であったと論じている。

Shih 氏が同書で扱っているのは主に穆時英の「新感覚派」的小説であり、本稿が対象とした小説とは異なる。しかし、ここでの彼女の問題意識は、私が本稿で扱おうと意図した論点と一致する。すなわち、穆時英の作品、乃至は彼自身を、抗日主義的愛国主義（ナショナリズム）からの偏差によって論じ、評価するのではなく、彼の描いた小説世界を、彼自身が構成員である上海の都市中間層の、現実にあり得た一つの選択肢として、読解を行っていくという、そうした手法が展開されているといってもよかろう。もち

ろんここでは、単に「作品それ自体の価値によって論じる」ことが主張されているわけではない。むしろここでは、作者自身の体験と記憶を現在の我々が引き受ける形で新たな読みを付与していく、そうした実践が提言されているのである。

上野千鶴子氏は、国民国家論の陥穽についてこう語っている。

……国民国家形成後のナショナリズム（強者のナショナリズム）と国民国家形成前のナショナリズム（弱者のナショナリズム）とを区別して、前者は悪だが後者は善だと擁護したがる帝国主義国家の知識人のひよわな贖罪意識にも、西川さんは無縁である。［中略］国民主義も国家主義もしょせん国民国家の自己意識の裏表という議論も単純化だが、強者のナショナリズムは抑圧的で弱者のナショナリズムは解放的という二分法も教条的である。そのどちらでもない議論の仕方が求められているのだろう。(17)

そして上野氏は、ナショナリズムに抗するのは、必ずしももう一つのナショナリズムである必要はなく、パトリオティズム、あるいは「領土なきナショナリズム」など、さまざまなシナリオがある、と述べる。

本文でも述べたように、上海人というアイデンティティも、〈想像の共同体〉であることではナショナリズムと同様である。そして、ここでどちらのアイデンティティがより優れているか、ナショナリズムとパトリオティズムのどちらがより好ましいか（あるいはどちらがましか）、という問いも無意味であろう。ここでは、あるカテゴリーへと収容されようとする際に採り得る一個人の可能性は、じつは多様なものであるということが提示されているのではないだろうか。上野氏が別のところで述べている、「カテゴリーの否定ではなく、「もっとカテゴリーを」」(18)というカテゴリーの複合化、すなわち、強力なカテゴリーの出現によって「上書き」されてしまうことのない、多元的・相対的なアイデンティティのあり方。あるいはローティ（Richard Rorty）のいう、自己の偶然性の感覚／歴史の偶然性から生み出される「人間の連帯」（「〈われわれ〉の感覚」）、すなわち、自らの立ち位置（ポジショニング）の偶然性（反本質主義的性格）を自覚しつつ、宗教や人種などの伝統的な差異よりも、苦痛や辱めという感情の類似に拠り所を置く社会のあり方(19)。個人のアイデンティティ生成に伴う、これらのような豊穣な可能性を、穆時英のテクストも同様に含意しているとは言えまいか。

穆時英の小説は、多元的なアイデンティティの世界へと、我々をいざなっているともいえよう。彼の作品を辿り、彼

にとってのあり得た可能性・選択肢を丹念に追っていく——そしてそこから生まれる新たな読みの可能性を掬い上げ、現在の日本（もしくは中国、アメリカ、……）に「偶然にも」存在している一人の人間として、自分なりの意味を付与していくことが、我々がいま／ここにおいて、彼のテクストを読む意義（の一つ）であるともいえるのではないだろうか。

注

(1) 鈴木将久「すべてがなくなった——穆時英の「記憶」——」（『中国哲学研究』第九号、一九九五）。

(2) 西村成雄『中国ナショナリズムと民主主義——二〇世紀中国政治史の新たな視界——』（研文出版、一九九一）、五九～七一頁。

(3) 『教育部立案　私立上海光華大学章程』（一九三〇年八月）所収の在籍者名簿には、「文学院特別生」として「十九歳」（数え）の穆時英の名がある。なお同名簿には、「文学院二年級」として、趙家璧の名も見える。穆時英の卒業は一九三三年のことである。『光華年刊　癸酉年　第八巻』上海光華大学癸酉年年刊社、一九三三、の卒業者名簿に穆時英の名前と写真が見える。なお、これまでの穆時英研究は多くが光華大学中文系卒業と記すが、実際には彼は英文系を卒業している。また、穆時英自身編集委員に名を連ねている光華大学の卒業文集『光華年刊　癸酉年　第八巻』は穆時英の手による「別辞」という文章を収めるが、ここに「私は光華の中で成長した。入ってきた時私は十四歳の子供であったが、今私はすでに二十二歳の青年になった」とあることから、彼が（光華）中学に入学するため上京したという自身の回憶を裏付けている。因みに、当時の光華大学英文系教官には徐志摩も名を連ねていた。

(4) 五四時期の恋愛と国民国家成立との密接に関わり合いについては、清水賢一郎氏の先駆的な諸研究がある（「明治の『みずうみ』、民国の『茵夢湖』：日中両国におけるシュトルムの受容」［『日本中国学会報』四十四集、一九九二］、「国家と詩人：魯迅と明治のイプセン」［『東洋文化』七四、一九九四］「革命と恋愛のユートピア——胡適の〈イプセン主義〉と工読互助団——」［『中国研究月報』五七三、一九九五］、「ノーラ、自動車に乗る——胡適「終身大事」を読む——」［『東洋文化』七七、一九九七］）。また、『交流』と同時期の、「恋愛と革命」に関する考察については、蔣光慈の小説創作に即して精緻な分析を加えた旷新年『1928：革命文学』（山東教育出版社、一九九八）を参照。同書では、一九二八～一九三〇における恋愛と革命というモデルの流行は、「〈五四〉以来の愛情と革命、性と政治という二大流行と最先端の題材を結びつけたことによって、苦悶と敏感の時代の青年たちの心をつかんだ」（九六頁）からであると述べられている。

(5) 鈴木前掲「すべてがなくなった」。なお、日本における「空閑少佐物語」の展開については、重信幸彦「顕彰と賛美のことば——「空閑少佐」という美談から——」（田中丸勝彦『さ

まよえる英霊たち』柏書房、二〇〇二所収）において詳細に論じられている。

(6)鈴木前掲「すべてがなくなった」。

(7)『時代日報』は一九三二年七月一日創刊。樊仲雲等が主筆。一九三六年四月三〇日をもって、「社の業務を改組し、『時代報』という中国唯一の中型日報を創刊して世に問う」（「本報緊要啓事」『時代日報』四月三〇日）ために停刊。

(8)許仕介等「我們這一代」に出てくる何人かの登場人物が、穆時英の他の小説（「中国一九三一」「一九三二～三三」、「田舎風景」「一九三五」等）と重なっていることについては、拙稿「穆時英「中国一九三一」」（『饕餮』第七号、一九九九）を参照。

(9)小説中の許仕介の家は宝興路と宝山路の交わる地点に設定されているが、ここは商務印書館や東方図書館が置かれていたところである。この二つは、一二八事変での日本軍の攻撃によって灰燼に帰す。

(10)舞台が戦場から病院へと展開するストーリーは、一九二九年に出版された世界的ベストセラーであるレマルクの『西部戦線異状なし』の影響が感じられる。同小説は中国では同年一〇月に林疑今訳（『西部戦線平静無事』上海水沫書店）、馬彦祥・洪深訳（『西線無戦事』上海平等書店）の二種類の翻訳が出され、一九三一年に出版された同じくレマルクの『還りゆく道』も、沈叔之訳（『戦後』上海開明書店、一九三一）、馮次行訳（『退路』上海光華書局、一九三一）、楊若思等訳（『戦後』上海大光書局、一九三一）、林疑今等訳（『西線帰来』神州国光社、一九三二）の四種類の翻訳がでるなど、さながら「レマルク・ブーム」と呼べるような状況にあった。なお、ここで登場する赤十字病院は、海格路（現在の華山路）沿いにあった中国紅十字会総医院という実在したものである。

(11)Bryna Goodman. *Native Place, City and Nation: Regional Networks and Identities in Shanghai, 1853-1937.* University of California Press, 1995 を参照。

(12)拙稿「上海事変をめぐる報道と上海人アイデンティティの形成――上海における社会・文化変容を通じて――」（『東方学』第百七輯、二〇〇四）を参照されたい。

(13)『宇宙風十日刊』第六〇期（一九三八年二月一一日）。

(14)この「頂刮刮」（まったく、本当に、の意）と「亨白冷」（全部で、の意）はともに上海語であり、ここで使われるのは実際にはそぐわないと思われる。あるいは、「まるで「頂刮刮」と「亨白冷」ということばが幻聴として聞こえてくるほどに上海語に飢えている」という意味か。

(15)浅野純一「中国現代小説の「現代主義」」（『金沢大学教養部論集：人文科学篇』二九―一、一九九一）。

(16)Shu-mei Shih. *The Lure of Modern: Writing Modernism in Semicolonial China, 1917-1937,* University of California Press, 2001. Chapter 11, "Performing Semicolonial Subjectivity: The Work of Mu shiying"

(17)「解説――「国民国家」論の功と罪」（西川長夫『国境の越え方――国民国家論序説』平凡社、二〇〇一所収）。

(18)上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』(青土社、一九九八)、九二頁。

(19)リチャード・ローティ『偶然性・アイロニー・連体――リベラル・ユートピアの可能性――』(齋藤純一他訳、岩波書店、二〇〇〇)。なお、ローティ的「アメリカ・リベラリズム」については、北田暁大氏が「政治と/の哲学、そして正義――ローティの文化左翼批判を「真剣に受け止め」、ローティを埋葬する――」(馬場靖雄編『反=理論のアクチュアリティー』ナカニシヤ出版、二〇〇一)、「〈アメリカ〉のモナドロジー――ネグリ=ハート『〈帝国〉』は〈アメリカ〉を訓致しうるか――」(『大航海』四七号、二〇〇三年七月)において的確かつ簡明に解説している。また、『理戦』七四「特集 リチャード・ローティ」(二〇〇三年九月)所収の諸論考も併せて参照。

(たかはし・しゅん 本学専任講師)